

# 松江クロード

## 3 「輝く店になれ」

【会社概要】  
所在地 松江市上乃木7-10-6  
電話番号 0852(26)7540  
事業内容 洋菓子製造・販売  
代表取締役 鶴田桂子  
従業員 14人



社長の鶴田治氏(左)と右腕として支えた工場長の佐川達也氏=松江市上乃木7丁目、松江クロード上乃木本店、2007年8月

1996(平成8)年に兵庫県西宮市のケーキハウス・ツマガリで研修を受けた(当時)松江クロード(松江市上乃木7丁目、鶴田桂子社長)の創業者・鶴田治は、研修での学びをもとに、新たにナポレオンとトリユフの販売を始めた。中でもナポレオンは、水を一切使わず牛乳100%のサクサクなパイとパイの層に創業時から作り続ける自家製カスタードクリームをたっぷりサンドし、看板商品の一つになった。

### ケーキ職人2人が入社

また、ツマガリのオーナーで、栄治のヒサモト時代の先輩である津曲孝は、松江に立ち寄った際に同店を訪問。「外からショーケースの明かりが見える配置にした方が、お客さまが来店しやすい」と助言した。この提案が現在の同店のレイアウトの基本になっている。



にしもと氏描き下ろしの、創業者夫婦をイメージしたイラスト看板=松江市上乃木7丁目

同時期、のちに栄治や同店を支える新たなケーキ職人が入った。一人は97年に入社した佐川達也(53)。安来市出身の佐川は複数の店舗でウィーン菓子やフランス菓子を学ぶと、帰郷して同店に入社。「お客さまに喜んでほしい」とよく言われました。当時は「お金もうけが大事」という風潮が強かったため、社長の考え方は今も心に残っています」と他店と違う栄治のスタンスを佐川が語る。以後、栄治の右腕として多くの商品開発に携わる。もう一人は、2000(同12)年

に入社した加藤秀二(47)。他業種で働いていた加藤は、21歳の時に同店の門をたたいた。「背中で仕事をしろ」と言われまして。洗い物一つでも、背中を見れば一生懸命かどうかはすぐわかる。また素材を大切にされていて、ポウルに生地が少し残っているだけでも「もったいない!」と。洋菓子職人としての仕事への向き合い方をたくさん教えてもらいました」と加藤。

2003(同15)年に栄治は、松江市手作り産業優良技能者表彰で功労賞を受賞する。松江市

# 「お客さまに喜んでもらえ」受け継がれる創業者の思い

におけるフランス菓子職人の先駆けでもある栄治は、島根県洋菓子協会の会長も長く務めていた。松江にフランス菓子を広めたことに加え、会長としての功績も認められた。その後、07(同19)年には同店の佐川も、優良技能者に贈られる奨励賞を受賞している。

### 病気発覚やむなく閉店

上乃木に本店を移して以降、順風満帆に進んできた同社だったが、14(同26)年、突然の不幸に見舞われる。2月に栄治の病気が



自家製カスタードクリームを使用したナポレオンやクレープなどのロングセラースイーツ



毎日、銅鍋で炊き上げるカスタードクリーム

が発覚。現状維持は困難で、やむなく学園通り店を閉店する。

その後も病状は回復せず、栄治は12月10日に生涯を終えた。米子時代から栄治を支え続けてきた桂子が、最期の様子を述懐する。「常に現状に満足することなく、菓子職人であることにご

だわり続けていました。『生涯現役』が口癖で、亡くなる1カ月前までお菓子を作り続けていました。体力が落ち、だんだん工場に立つ時間が短くなる中でも、クレープだけは毎朝焼き続けていました」

また学園通り店の閉店に当たり、栄治は次のような言葉を遺した。「大好きな学園通り店を閉めることは心残りだけど、これからは上乃木本店1店舗で輝く店になれ。桂子は社長就任後も折に触れ、この言葉を思い出すという。

栄治の後を受けて製造のトップを務める佐川も栄治をしのぶ。仕事には熱いけれど、口数が少ない、シャイな方でした。朝5時ごろから仕込みを始めていました。私たちが出勤すると、違う仕事に移られた。直接接する機会が少なかったのも、もっと一緒に働きたかったと

いう思いが残っています」

### にしもと氏との出会い

一方、栄治の病気は新たな出会いをもたらした。栄治の長女で、現在専務を務める石川理早(50)が語る。「亡くなる少し前のことです。1年ほど前に、東京の六本木ヒルズを訪れた際に持ち帰ったハロウィンのパンフレットを見せてくれたんです。『これ、いいだろう』とうれしそうに。その頃、日に日に体力が落ちていたので、この絵を描いたイラストレーターさんにクロードのイラストを描いてもらったら、父も元気になるのではないかと思っ



鶴田治氏最後の誕生日に贈った、にしもと氏のおさむ氏のイラスト=2014年11月

たんです」

調べる、描いたのは広島県在住のにしもとおさむとわかった。連絡を取り事情を話すと、すぐに絵を描いてくれた。「おかげで父の誕生日の11月30日にプレゼントすることができました」

にしもとのつながりは、当初はこの時だけのつもりだったが、のちにさまざまな仕事を依頼するようになる。21(令和3)年から始めたカレンダーのイラストも、その一つである。

小泉八雲にちなんで製作した「かっぱ缶」「ゆきおんな缶」「ヘルンサブレ」などのイラストも、にしもとの依頼した。

「父が好きだったにしもとさん、父が『どうしてもしたい』と言って始めたんです。好きなお花はピンクのチューリップで、いま思えば父が持っていた厳しさの中に、あるやさしさがある、いまもクロードを支えてくれていると思います」

「父が好きだったにしもとさん、父が『どうしてもしたい』と言って始めたんです。好きなお花はピンクのチューリップで、いま思えば父が持っていた厳しさの中に、あるやさしさがある、いまもクロードを支えてくれていると思います」

(文中敬称略)  
次号に続く  
(フリーライター・内藤潤)